

藤沢周平作品を扱ったので、事前にその本を読んだら面白い。

「50冊くらいを一気に購入して、読んでみたらとにかく面白くて。毎日毎日読みふけりました。藤沢作品はほぼ全作読み終えて、他の時代小説も読んでみたくなり、次は池波正太郎」

その頃にはもう、野口卓として落語やシェークスピア、音楽などをキーワードにした著作を発行していた。

「当時に60歳をこえていて、そろそろ自分のオリジナルで、構想から全て自分で練り上げた本を書きたいと思っただんです。それで半年ほどかけて現代小説を450枚くらい書きました」

知り合いの出版社3社に持っていたが、「どこも丁重に断られて（笑）」

落胆する野口さんに、知人のシナリオライターが出版社を紹介してくれた。「少しは期待してたんですが、そこもダメでした。ただ、帰ろうとしたときに、時代小説なら可能性はあるよ」と言ってくれたんです」

10代で吉川英治の『宮本武蔵』の世

界に引き込まれた野口さんが現代小説から方向転換したのはそこから。南国の園瀬藩を舞台にした時代小説『軍鶏侍』を書き上げ、出版社に持って行った。徳島で目にしていた川や街並をベースにした。軍鶏は新宿の下宿先の大家さんが飼っていたため、いろいろ教えてもらっていた。

「すぐにシリーズ化が決まりました。1冊目は持っている知識を全て出して書いたのですが、そんなに辛くはなかったですが、2冊目はしんどかったです（笑）」

そのとき既に67歳。「自分がやりたことのために故郷を捨てるようになり、実は20代半ばまで両親に連絡しなかったんです。父は『軍鶏侍』が出る前に、母は更にその7年前に亡くなっ

てしまっただけで、報告できなかつたのが残念です」

さまざまな経緯を経て『軍鶏侍』で小説家デビューして以来、8年間で26もの作品を出版した。昨年は「小説新潮」に連載していた浮世絵師写楽の正体が

徳島藩お抱え能役者の齋藤十郎兵衛ではなく、徳島藩10代藩主蜂須賀重喜だったとする大胆な新説の時代小説『大名絵師写楽』の単行本を出版した。今年3月には野口さんの時代小説『なんてやつだよろ相談繁盛記』が、昨年出版された文庫から最優秀作品を選ぶオリジナル文庫大賞を受賞した。

今、構想を温めているのはモラエス。「来日して、日本の女性に惚れて西洋乞食とまで言われながらも帰国しないで日本で亡くなったモラエスを、どんな視点で取り上げるか考えてるところです」

70過ぎでの創作意欲は、自分の人生を正直に貫いた証しのようなのだ。

（取材・文／北島由記子 写真／永井守）

